梅花児童文学, 31:24-37

明治・大正期における昔話「3 びきのくま」の受容研究

The Reception of the Folktale “The Three Bears” in the Meiji and Taisho Periods

丸尾　美保
MARUO Miho

要旨

イギリスの昔話「3 びきのくま」（“The Three Bears”）の日本での最初の受容は、明治期の英語副読本『Popular Fairy Tales: Adapted for Japanese Students（よく知られた昔話集：日本の学生たちに適する）』（英学新報社 1902）に所収された“The Story of The Three Bears”（「3 びきのくまの話」）であったと推定する。現在判明しているところでは、邦文での初めての受容は児童雑誌『少年』（時事新報社 1905 年 2 月）掲載の「銀髪さん」であった。「三匹の熊」のタイトルは、次に出版された『子供の楽園 ： 教育童話』（東基吉 同文館 1907）で最初に用いられた。大正期になると幼年向け絵雑誌や児童誌に掲載され、『赤い鳥』にも「大熊中熊こぐま」（佐藤春夫 1918.12）として掲載された。また、幼稚園での語り聞かせ用物語集『幼児に聞かせるお話』（内田老鶴圃 1920）にも収録された。

明治・大正期の「3 びきのくま」の受容は、英語学習、雑誌での受容、幼稚園での語り聞かせに大別される。また、「3 びきのくま」の再話の変遷から、幼年文学観の変遷もうかがえる。

Abstract

The first version of the British folktale “The Three Bears” in Japan was “The Story of the Three Bears” in the Meiji period English supplementary book, *Popular Fairy Tales: Adapted for Japanese Students* (Eigaku Shimposha, 1903). The first Japanese version was “Ginge-san,” published in the children’s magazine “Shonen” (Jiji Shimposha, February 1905). The title “The Three Bears” was first used in *Kodomo no Rakuen: Kyoiku Dowa* (*Children’s Paradise: Educational Fairy Tales*) written by Higashi Motokichi (Dobunkan, 1907). In the Taisho period, it was published in several picture magazines and children’s magazines, as well as in “Akai-tori” as “Oguma Chuguma Koguma” (by Sato Haruo, December 1918). The story was also included in a collection of stories for storytelling in kindergartens, *Yoji ni Kikaseru Ohanashi* (*Stories to Tell Infants*) (Uchida Rokakuho, 1920).

The acceptance of the tale of the “three bears” in the Meiji and Taisho periods can be classified into three categories: for learning English, publication in magazines, and storytelling in kindergartens. In addition, the retellings of “The Three Bears” reveal changes in the perception of young children’s literature.

Key Words
3 びきのくま、イギリス昔話、英語読本
The Three Bears, English fairy tales, English readers

１．はじめに

昔話「3 びきのくま」は、現在では、女の子が 3 びきの熊の親子の留守中に森の中の家に入りこみ、大中小それぞれ三種類のスープと椅子とベッドを試した後で小さなベッドで寝込んでいるところに、熊の親子が帰宅したため、あわてて逃げ帰ったという内容で知られている。日本では、ロシアのトルストイ再話による絵本も出版されているが、元来はイギリスの昔話であった[1]。

確認されたこの昔話の最古の例は、1831 年にイギリスのエリナー・ミュア（Eleanor Mure）が手作りした絵本『3 びきのくまの話』（*The Story of the Three Bears*）とされている。その後 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、最初 3 頭の牡熊であった熊たちは父熊、母熊、熊の坊やからなる熊の家族となり、侵入者は行儀の悪いお婆さんから金髪の少女へと変化した。少女の名前は、ジョセフ・カンドール（Joseph Cundall）が 1850 年出版の『幼い子どもたちのための楽しい物語集』（*A Treasury of Pleasure Books for Young Children*　邦題は執筆者による）でお婆さんを「シルバーヘア（銀髪さん）」（Silver-hair）という名前の女の子に書き換えて以後変化していき、1860 年頃から「シルバーロックス（銀の巻毛さん）」（Silverlocks）、「ゴールデンヘア（金髪さん）」（Golden Hair）となり、19 世紀末に「ゴールディロックス（金の巻毛さん）」（Goldilocks）が登場して[2]、現在に至っている。

今日日本でも「3 びきのくま」はよく知られた昔話となっており、2000 年以後だけでも絵本や幼年向けの物語として 30 件以上の出版が確認される。

「3 びきのくま」の日本での受容を調査したところ、最初は明治期に英語学習の教材として紹介され、その後、雑誌や物語集に幼年向けとして登場したことが判明した。再話者や媒体によって内容に変化が生じており、幼年文学観の変遷もうかがわれる。本論文では明治・大正期の受容について考察する。

２．英語学習用教材

確認できた「3 びきのくま」の日本最初の紹介は、1902（明治 35）年出版の英語の副読本であった。その後、1926（大正 15）年まで、現在のところ 3 件の英語学習のための出版物への掲載を確認した。本章では、明治・大正期の英語学習用教材としての受容を考察する。なお、タイトル等の邦訳は執筆者によるものである。

1）1902（明治 35）年　渡辺光子「The Story of the Three Bears（3 びきのくまの話）」（『Popular Fairy Tales: Adapted for Japanese Students（よく知られた昔話集：日本の学生たちに適する）』）英学新報社　1902.5.15

奥付以外は全て英文で書かれた英語学習者のための副読本で、扉には「by MITSU WATANABE（渡辺光著）」「Revised by ALICE M. BACON（アリス・M.ベーコン校閲）」と記されている[3]。著者の渡辺光子（名前の記述は 1903 年版奥付による。生没年不明）は、英語教師として来日していたアリス・M・ベーコン(Alice M. Bacon 1858-1918)の養子となって 1889 年にアメリカに渡り、1900 年に帰国して同年に開校した津田梅子創設の女子英学塾の教師として養母とともに働いた。出版した英学新報社は、同塾の教員らが編集発行していた英語学習者向けの雑誌『英学新報』の発行元であった。『Popular Fairy Tales』は、1903 年と 1904 年にも追加出版されたことから、一定の普及がみられたものと推測する。

冒頭に置かれた前書きでアリス・M・ベーコンは、昔話は英語を話す少年少女のための初等教育の一部であり、英語を学ぶ生徒には会話や文学によく登場する物語の知識が必ず役に立つと説いている。また、本書では学習用に表現を単純化して改作したと記している。内容は「赤ずきん」「シンデレラ」「3

びきのこぶた」「ジャックと豆のつる」「美女と野獣」などのポピュラーな昔話 20 話が 2 部に分けて掲載されており、「3 びきのくま」は第 I 部の最終話（第 10 話）として収録されている。

「3 びきのくまのはなし」は章立てされており、熊たちが帰って来たところまでを I 、それ以後が II である。また、1 図の挿絵が付されている。

登場者：a Little, Small, Wee Bear（小熊）、a Middle-sized Gear（中熊）、a Great, Huge Bear（大熊）、品性の良くないお婆さん。

内容：ジョセフ・ジェイコブズ『イギリスの昔話』（*The English Fairy Tales*, 1890）所収の「3 びきのくまの話」(“The Story of the Three Bears”)を少し改変したストーリー展開である。お婆さんはお粥を食べ、椅子を壊し、ベッドで眠る。熊の大きさに合わせて活字の大きさを変えることも含めてほぼジェイコブズを踏襲しているが、中熊は女性形が用いられ、窓から逃げたお婆さんが「監獄に入れられたかもしれない」という文章は省略されている。

挿絵：洋服を着て擬人化された熊の家族が、帰宅してお粥が食べられたことに気づいた場面（図 1）のみ。

底本：本書にはジェイコブズ『イギリスの昔話』所収の「3 びきの小豚のはなし」(“The Story of the Three Little Pigs”)、「トム・ティット・トット」(“Tom Tit Tot”)などがほぼ原文通りに掲載され、同書の挿絵をそのまま掲載している場合もあるため、この話も『イギリスの昔話』を底本としたと推定する。ジェイコブズの「3 びきのくまの話」は、1837 年に出版されたロバート・サウジー作『ドクター』所収の原文を尊重して掲載したものであった。

図 1　熊の家族

ジェイコブズ『イギリスの昔話』所収の「3 びきのくまの話」の文章を踏襲して掲載しているが、原文にない章立てがなされ、原文では牡熊であった中熊を雌熊に変更して 3 匹の熊を家族とし、それに合わせて挿絵も熊の家族を描いた絵に差し替えている。熊が夫婦とその子に変更されたのは、英語で会話する際や文学理解の素養として昔話の知識を与えるという本書の目的から、英米で流布している形に合わせたのであろうと推測する。民俗学者のジェイコブズは、サウジーの話を原型と推測して『イギリスの昔話』に収録したが、20 世紀初頭の米国や英国では 3 匹の熊は、父・母・ぼうやの家族として認識されていた。お婆さんが監獄に入れられるくだりは用語も古めかしく、社会状況も時代に合わなくなっていたため、当時の英米の出版でも省略されることが多かった。絵の出典については調査中である。

2）1913（大正 2）年 岸本能武太「The Three Bears（3 びきのくま）」（『Girls' Model Readers: Book Two』奥付は『女子もでるりーだず』第二巻）開成館　1913.12.3

著者の岸本能武太（きしもと のぶた 1866-1928)は、ハーバード大学で神学を学び 1894 年の帰国後、宗教・倫理分野や英語教育の分野で活躍し、多数の著作を残している。『Girls' Model Readers』の扉に岸本の肩書きが日本女子大学英語教授と記されているが、同時期に早稲田大学教授も務めていた。出版社の開成館（東京）は明治期から教科書出版を手がけており、英語の教科書も多種出版していた。

「The Three Bears」は、大正 2 年に出版された女子学生向け英語教科書の第二巻に所収された。第二巻は、アルファベットなどを第一巻で学んだ学生向けで、短い詩や物語、イソップ寓話などが文法学習用の例文や練習問題を付けて掲載された。「The Three Bears」は Lesson28 から 32（Lesson30 は別

作品）に分割されており、文章には 4-5 行毎に番号が振られている。

登場者：a great big bear（大熊）、a middle-sized bear（中熊）、a tiny little bear（小熊）の 3 匹の熊は父、母、赤ちゃんの家族で、女の子は Golden-hair（金髪ちゃん）と呼ばれる。

内容：3 匹の熊の家族とその持ち物の大中小の説明から始まる。熊たちはスープを作って散歩に出かけた。Golden-hair が熊たちの留守宅に侵入し、スープ（熱すぎ、冷たすぎ、ちょうど良い）、椅子（硬すぎ、柔らかすぎ、ちょうど良い）、ベッド（頭が高過ぎ、足が低すぎ、ちょうど良い）を試した後、小さなベッドで眠る。熊たちは帰って来て、それぞれの場所で身体の大きさにあった声で話す（文字の大きさは変わらない）。Golden-hair は熊たちを見て、窓から飛び出して家に駆け戻ると、二度と家から逃走したりしなかった。

図 2　熊の家族

挿絵：6 図。熊たちは洋服を着ていない（父熊は眼鏡とステッキ、母熊はエプロンを身につけている）。熊の家は石造りの立派な建物で、家具、暖炉などが揃っている。熊たちは新聞を読むなど文化的な生活をしていることが見てとれる（図 2）。「Once upon a time」（むかしむかし）で始まるが、女の子は現代的なチェックのワンピースを着てストッキングをはいており、当時の英米の少女として描かれている（図 3）。

図 3　Golden-hair

底本：調査中

物語は簡略化され、簡単な単語と短い文章で書かれている。また、章末の問題は内容の理解を助け、「too hard, too soft」などの構文を学ぶように設定されている。Golden-hair（金髪ちゃん）という名前は、Goldilocks（金の巻毛ちゃん）と並んで当時の英米の出版物で用いられていた名前である。熊の快適な暮らしやモダンな服装の Golden-hair の挿絵は、ユーモラスで洗練されており、読者の女生徒に欧米の生活やファッションへのあこがれをもたらしたであろうと推測する。

なお、この教科書の大正末期の改訂版にも「The Three Bears」が収録されていたことが、同書の解説書『岸本氏女子新モデルリーダーズ詳解 巻 2：Kishimoto's Girls' New Model Readers No.2』（東京辞書出版社　1925 年）から判明した。「3 びきのくま」の話が好評で、一定の流布をみたものと考える。

3）1924（大正 13）年　山崎貞編「The Three Bears」（『バイ、ザ、ハース、エンド、イン、ザ、フィールド　By the Hearth and in the Field』（炉端で、そして野原で）』）北星堂書店　1924.11.7

編者の山崎貞(やまさき てい 1883-1930)は、正則英語学校を卒業し、母校や早稲田大学などで教鞭を執った。また受験英語の指導に当たり、数多くの受験参考書を出版した。出版社の北星堂書店は、1914 年の創業以来 2011 年まで営業を続けた英語学習書・英語関連書籍の老舗であった。

本の内容は、日常的な話と「3 びきのこぶた」「わらと炭と豆」「ヘンゼルとグレーテル」「海の水が塩辛いわけ」などの昔話が併載されている。物語のみの掲載で、数行毎に番号が振られているものの学習的な解説や設問は付されていない。

登場者：Father Bear（父熊）、 Mother Bear（母熊）、 Baby Bear（赤ちゃん熊）の 3 びきの熊と女の子（a little girl　名前はない）

内容：父熊は仕事に行き、母熊は家の世話と食事作り、赤ちゃん熊は一日中庭で遊んでいた。昼に父熊が帰

って来て、昼食の前に家族で散歩に行った。熊たちは、テーブルクロスを敷き、各自のお椀を出してスープを注ぎ、身支度を調えて出かけた。女の子が家にやってきた。森に行ってはいけないという母の言いつけを守らない、不作法でよくない子だった。熊の家族のスープ（胡椒が多い、塩が多い、ちょうど良い）、椅子（高すぎ、硬すぎ、ちょうど良い。椅子の脚を壊す）、ベッド（硬すぎ、柔らかすぎ、ちょうど良い）を試し、赤ちゃん熊のベッドで眠った。熊の家族が散歩から帰り、3 つの場所で 3 回くり返して怒った。女の子は目が覚めて熊に驚き、窓から飛び出して走って家に帰った。母に叱られ、罰としてベッドに入れられた。

図 4　散歩に出かけた熊の親子

挿絵：1 図。熊の家族が散歩に行っている場面。ユーモラスな雰囲気。（図 4）

底本：不明。独自の再話と思われる。

女の子、熊の家族ともに 3 回くり返しがきちんと守られているが、3 匹の熊の声が体の大きさに比例することは省略されている。他にあまり例を見ない熊の両親と赤ちゃんの生活ぶり（父熊は仕事、母熊は家事と料理、子熊は遊ぶだけ）には、大正末期の近代的な家族観が反映していると推測する。また、食卓の用意や散歩に出かけるための身支度など、洋風生活の紹介ともなっており、女の子が靴を履いたままベッドに入ったのは不作法であると加筆している。言いつけを守らない女の子が罰を受ける結末など、読み物としての面白さがある。

4）英語学習用教材の考察

3 例を考察すると、どれも英語教育に功績のあった教育者による紹介であった。特に最初の紹介である『Popular Fairy Tales』（1902）所収の「The Story of the Three Bears」は、ジェイコブズの『イギリスの昔話』の文章がほぼそのまま伝えられており、受容研究のうえで貴重と考える。その中で、原文の牡熊 3 頭が両親とぼうやの家族に置きかえられたことは、20 世紀初頭の「3 びきのくま」観を考察する上でも興味深い。

また、学習書でありながら、3 冊とも挿絵によって昔話の雰囲気やユーモラスな味が伝えられていた。大正 2 年の岸本能武太『女子もでるりーだず』第 2 巻所収の挿絵は、家の内部や現代的な服を着た女の子を描いており、読者に英米の生活を想像させて学習意欲を高める効果があったと考える。英語学習教材「3 びきのくま」には、挿絵も含めて著作者の英米文化伝達の意識が反映していることもうかがえる。

「3 びきのくま」の受容を考察するに当たって、英米の古い出版物をできる限り調査した。しかし、渡辺光子「The Story of the Three Bears」以外は、底本を特定することができなかった。今後も調査を続けたい。

３．明治期の受容

英語学習関係を除くと、明治期に「3 びきのくま」が出版されたのは、1905（明治 38）年の雑誌『少年』掲載の「銀髪（ぎんげ）さん」と、1907（明治 40）年出版の東基吉『子どもの楽園』に所収された「三匹の熊」の 2 例であった。個別に考察する。

1）1905（明治38）年　ひばり「銀髪（ぎんげ）さん」（『少年』17号 1905.2.1 時事新報社）

作者のひばりは、時事新報社記者の筆名と推測するが、詳細不明である。挿絵画家の名前は記されて

いないが、絵柄から時事新報社の絵画部員で、『少年』にも関わっていた北沢楽天と推測される。目次によると、楽天はこの 17 号に「人を呪わば穴二ッ（繪話し）」と「懸賞考物」を掲載していた。『少年』は 1903 年に時事新報社が創刊した少年誌で、1924 年まで継続出版された。

登場者：銀髪（ぎんげ）さん、父さん熊、母ちやん熊、赤ちやん熊

内容：3章に分かれ、各章にタイトルが付されている。

(一) 胡蝶（ちようちよ）追い：女の子から話が始まる。銀髪さんが森に花を摘みに行き、チョウチョを追っていくと小さな家に来た。銀髪さんは知らなかったが、家は三疋の熊の家で、熊たちはお昼の食事前に運動のために歩きに行っていた。戸が開けっ放しだったので、銀髪さんは家に入った。

(二) 熊の家（うち）：銀髪さんが台所に行くとお椀が三つあった。お粥（かい）は、大きい順に餘り熱い、餘り冷たい、丁度可（ちょうどよ）いで、銀髪さんは小さいお椀のお粥を食べてしまった。お座敷の椅子を試し、丁度可い小さい椅子に座ると壊れた。二階の寝臺（ねだい）を試し、小さい寝臺で銀髪さんは眠ってしまった。

図 5　p.2　銀髪さん

(三) 三疋の熊：銀髪さんは寝ていて、椅子を壊した夢を見て笑った。お昼に熊たちが帰って来て、三つの場所で唸ったり、金切り声を出したり、泣き声を出したりした。最後は小さい熊が怒鳴り、銀髪さんが目を覚まして窓から飛び降りた。草の上を転がって上を見ると、三疋の熊が唸りながらにらんでいる。銀髪さんは命からがら森を駆け抜けて家に帰ってきた。「目出度しめでたし。」

図 6　p.3　お粥を見て怒る熊の親子

挿絵：3 図が各ページ 2 段組の文章の中央付近に配置されている。「銀髪さん」は名前から西洋の話が元であることが示唆されているものの、草履を履いて、着物に短い袴をつけた和服姿で描かれている。少女の短い袴は、他の幼年雑誌の挿絵にも登場しているが、洋装のスカートを連想させる。熊は服を着ていないが、擬人的に描かれている。口を開けて怒っている熊は歯がとがっており（図 6・7 参照）、野生の凶暴性が感じられる。動きや感情の表現が巧みであることからも、画家は漫画家であった北沢楽天と推定する。原画があるかは調査中である。

図 7　p.4　目を覚ました銀髪さん

底本：銀髪さんは、Silverhair（銀髪さん）あるいは Silverlocks（銀の巻毛さん）の訳であると思われるが、現在のところ底本と判断できる作品は判明していない。

邦訳で紹介された最初の「3 びきのくま」である。英語学習用を含めても 2 番目の出版であった。全 4 頁の物語展開は、女の子から始まるタイプと推測される原話に沿った過不足のないものであった。銀髪さんと熊たちの 3 度の繰り返しは、省略なしに再話されている。父さん熊は「此身（おれ）」、母ちやん熊は「私」、赤ちやん熊は「坊ッちやん」と自称し、言葉の最後は「ナー」「子（ね）ー」「よー」と変化させる工夫がなされており、日本語らしいなめらかな訳である。挿絵は、擬人化されている熊たちが野性味を保っており、登場人物の感情の動きやその後の展開を予想させる優れたものであった。

2）1907（明治40）年　東基吉「三匹の熊」（『子供の楽園 ： 教育童話』）同文館　1907.4.20

作者の東基吉(ひがし もときち 1872-1958)は、東京師範学校を卒業した教育者で、1900 年に東京女子

師範学校助教授（のち教授）となった。附属幼稚園の批評係も兼務して幼稚園教育研究に従事し、1901年にフレーベル会機関誌『婦人と子ども』（『幼児の教育』前誌）を創刊して編輯主任をつとめた。1908年以後は、各地の師範学校校長を歴任し、女子職業学校経営にもあたった。妻のくめは「鳩ポッポ」などを創作した作詞家で、『婦人と子ども』誌に唱歌を掲載した。

画家名の記載はないが、落款から日本画家で版画家の桐谷洗鱗(きりや せんりん 1877-1932)と判断する。洗鱗は1897（明治30）年に富岡永洗に入門し、その後橋本雅邦に師事した。1907年に東京美術学校日本画科専修科を卒業後は仏教画を描く一方で、博文館他の出版物に挿絵を描いた。

「はしがき」によると、『子供の楽園：教育童話』は各国の昔話などを東が再話した童話集で、子どもを楽しませながら想像力を養い、修身とは異なる「人事界と自然界とにおける法則、関係なども」自然に了知するようになるとする、窮屈でない「教育的な」話を集めたものであった[4]。

登場者：お父さん、お母さん、子供の3匹の熊、森の近所に住む頓子（とんこ）

内容： どこかの大きな森に住む3匹の熊が、朝ご飯の支度をして散歩に出かけた。頓子は早起きで、草や苔の露などに親しんでいた。熊の家に来ると戸が開け放しなので入ってみた。茶の間の朝食は、お菓子や果物やパン菓子、七輪の鍋にぐらぐら沸き立っている牛乳だった。頓子は子熊の座布団に座って全て食べ尽くした。七輪を引っ繰り返して子熊の座布団を半分焼いても、頓子は平気な顔をしていた。二階のお座敷には床が三つ敷いてあった。頓子は最初から子熊の寝床の上に寝て、唱歌を歌っているうちに寝入った。熊たちが帰って来て、子熊が半焼きになった座布団を見て泣き声をあげた。頓子の仕業を見た3匹は3度ずつそれぞれの言葉で怒った。頓子を見つけた熊たちは、人間の子が熊だと知っていて馬鹿にしていたずらをしたとして、頓子を食べてしまおうとした。逃げた頓子は戸口でお父さん熊に捕まったが、七八匹の猟犬がワンワンと駆けてきたので、親子の熊は家の中へ逃げ込んだ。頓子は命は助かったが、手足は傷だらけ、着物もあちこち裂かれて、お家まで逃げて帰った。「めでたし／＼。」

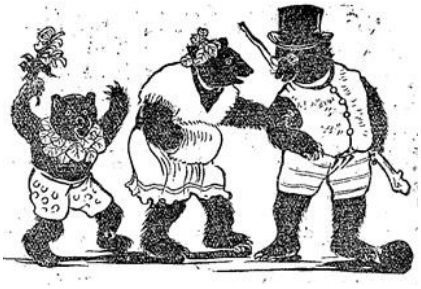

図8　p.28　帰宅する熊の親子

図9　p.33　座布団を焦がされて泣く子熊

挿絵：2図。両図とも熊の親子を描いており、頓子は描かれていない。熊たちは洋服を着ており、母熊と子熊は葉っぱを身につけている。物語の内容に合わせて、七輪や座布団が描かれている。（図8、9参照）

底本：頓子が早起きで草の露を見たり花の香りを嗅いだりすること、熊たちが朝食にミルクを飲むことは、19世紀末から20世紀初頭に出版された絵本 *The Three Bears*（Aunt Louisa's Sunbeam Toy Books シリーズ）（次章参照）と一致しているが、熊の会話の文字の大きさを変えたところは一致しない。引き続き調査したい。

「三匹の熊」は、東による独自の再話で、物語の省略や結末の改変がなされている（上記下線部参照）。明治末の世相と子どもの嗜好に合うように、熊たちの朝食には「お菓子や果物や麺麭（ぱん）菓子」がお皿に盛ってあるとし、椅子は座布団、ベッドは床（とこ）に置きかえたほか、七輪にかかった鍋で牛乳が沸き立っていると書き換えている。結末は、犬が来て助けられたものの、頓子に罰がくだされたかのように、手足が傷だらけになり、着物も破かれたとした。

3回くり返しは全て省略され、頓子は最初から子熊の座布団に座って、熊の家族のごちそうを全部食

べてしまい、子熊の床で眠る。熊たちの声は、それぞれ文字の大きさを変えて表現されているが、話す順番は意識されていない。東は順番通りに繰り返す効果をあまり認識していなかったと推測される。

なお、頓子が勝手に熊の食事を食べた場面（同書 30 頁）で、「頓子のした事はひどくよくないことなんです」と述べたり、頓子は森のなかでひとりで育ってきたので「まだ幼稚園へも学校へも行つた事はなし」、鳥や虫の他は友だちもいないので、「よくない事だといふことも知らなかつたのでせう」と記したりしているところから、東は教育者として、物語の展開の中で子どもたちに礼儀の大切さを教え、幼稚園教育の有用性について説いているとも言える。

3）明治期の考察

最初の邦文による「3 びきのくま」は、児童雑誌『少年』（1905 年 2 月）掲載の「銀髪さん」であった。タイトルが底本通りの「三匹の熊」となったのは東基吉『子どもの楽園』（1907 年）からであった。「銀毛さん」は底本の椅子や寝台などをそのまま生かして再話され、内容も原文が踏襲されていると推定する。東再話の「三匹の熊」は、七輪やパンなどの当時の新しい文化を熊の家に取り込んで日本化されており、内容も改変されている。東は善悪のわかっていない頓子を諫め、結末で熊にひどい目に合うことを加筆しており、教育者としての姿勢がうかがえる。また、子どもに面白く話そうという意識は見えるが、3 回くり返しという物語形式の面白さについてはまだ認識されていないと判断する。

「銀髪さん」は女の子の視点からの、東再話「三匹の熊」は熊が中心の再話であったが、熊が野生の凶暴性を有していることは明治期の再話に共通していた。挿絵は 2 作とも日本の話として描かれており、どちらもユーモラスな絵柄であった。

４．大正期の受容

大正期（1912-1926）には、英語教育関係以外に 4 件の受容が確認された。そのうち 3 件は児童雑誌での紹介であった。

1） 1914（大正3）年　「熊のお家（うち）」（『子供之友』1巻1号）婦人之友社　1914.4.1

『子供之友』は、羽仁もと子を編集主幹として創刊された教育性を重視した児童雑誌であった。その記念すべき創刊号に「熊のお家」が掲載されたのは、「3 びきのくま」が子どもに最適な物語であるという認識があったものと推測する。

作者名も画家名も記載されていないが、画風から『子供之友』の絵画主任の北沢楽天(きたざわ らくてん 1876-1955)の挿絵と推測する。楽天は明治から大正にかけて一世を風靡した漫画家・挿絵画家で、1899 年に時事新報社に入社し 1906 年に一旦退社したが 1914 年に復帰した（前章の時事新報社『少年』掲載の「銀髪さん」の挿絵も楽天作と推定）。楽天は『子供之友』でも絵画主任を務め、表紙から裏表紙まで読者へのサービス精神にあふれた編集をした。

登場者：まり子、お父さん熊、お母さん熊、あかんぼ熊

内容：「昔昔、ある森のなかに、美しい金色の髪をした、まり子といふ子供が住んでゐました。」朝早く鳥や蝶がいて露が光る森のなかを歩くのが好きだったまり子は、ある日、きれいな家の前に出た。御飯台にお乳［ミルク］の入った三つのお椀があった。ここは熊の家で、熊の家族は朝のお乳がさめる間、運動に出かけていた。まり子は大きいお椀から順にお乳を試すと、熱すぎ、冷たすぎ、丁度良かったので、一番小

さいお椀のお乳を全部飲んだ。椅子を大きい順に試すと、固くて痛い、柔らかくてブクブク、あんまり小さいので壊れた。二階に上がり、寝臺（ねだい）を順に試すと、長過ぎ、幅が広すぎで、丁度良い小さい寝臺で眠ってしまった。熊たちが帰宅し、侵入者に気づき、大きな声、中くらいの声、小さい声で、お乳、椅子、寝臺のそばで文句を言った（活字の大きさも3段階に変化）。まり子を見つけると、3びきとも「食べてしまおう」と言った。目を覚ましたまり子は、そばの窓から逃げだした。熊たちも飛びだしたが、太っているのでコロコロ転んでいるうちに、まり子は走ってお家に帰った。

図 10　熊の家族

挿絵：5図。まり子は金髪で白いエプロンを着けたワンピース姿の西洋の女の子。熊の家族は、洋服を着て西洋風であるが、あかんぼ熊は日の丸を持っている（図10）。家の調度は西洋風。熊の怒った顔は迫力がある。

底本：挿絵が類似していることから、フレデリック・ウォーン社発行「ルイザおばさんの日光絵本」（Aunt Louisa's Sunbeam Toy Books）シリーズの絵本『3びきのくま』（*The Three Bears*. London; New York: Frederick Warne 出版年不明）を参照していると推定する。内容も類似点が多い（上記＿下線部）。

絵の類似（図 11 と図 12 参照）と内容の一致から北沢楽天が「ルイザおばさんの日光絵本」シリーズの『3 びきのくま』を下敷きにしたことは明白である[5]。しかしテキストに関しては、ルイザおばさん版は熊の声の大きさで文字を変える工夫はされておらず、女の子（Golden Hair）がお乳や椅子を試さないなど、「熊のお家」とは異なっている（上記＿下線部）。同年の『子供之友』には、三宅興子の指摘のように[6]、「3 びきのくま」（“The Story of the Three Bears”）を所収しているレズリー・ブルック『金のがちょうのほん』（Leslie Brooke, *The Golden Goose Book.* London: Frederick Warne & Co., 1904）から 4 作品が掲載されており[7]、「熊のお家」を除く 3 話はレズリー・ブルックの挿絵が模倣されていることから、この本が『子供之友』編集部に種本として存在したことは明らかである。熊の会話の文字の大きさの工夫と 3 回くり返しがきちんと書かれていることから、『金のがちょうのほん』も参考にしたのであろうと判断するが、熊から話が始まること、文章に枝葉が多いこと、熊の性格が穏やかであることなど、「熊のお家」の内容と異なるところが多々ある。

図 11 『子供之友』1 巻 1 号 p.9「熊のお家」挿絵

図 12 *The Three Bears* 挿絵

なお、楽天が挿絵を描いたと推定する『少年』掲載の「銀髪さん」（前章 1）参照）は、女の子の名前やお粥であること（「熊のお家」ではお乳）などから、「熊のお家」とは底本が異なると判断する。しかし、「銀髪さん」では女の子のお粥、椅子、寝台の 3 回くり返しがきちんと語られていることから、「銀髪さん」の底本も「熊のお家」の再話に影響しているのではないかと推測される。以上から、「熊のお家」は、3 種の「3 びきのくま」の原典を参照したうえで、『子供之友』編集部と楽天によって独自に作成されたものと判断する。

ブルック版の挿絵に比べるとルイザおばさん版は、女の子が幼く無邪気に描かれており、女の子を食べようとした狂暴な熊が窓から落ちて転げるといった内容も滑稽で、楽天の感性にあったものと推測される。あかんぼ熊が日の丸の旗を持っている絵柄（図 10）は、楽天のサービス精神の表れと言えよう。

2） 1917（大正6）年　「熊の家（くまのいへ）」（『日本幼年』3巻6号）東京社　1917.6.1

『日本幼年』は 1915 年創刊の幼年絵雑誌で、当時は倉橋惣三が監修し、和田古江が編集を担当していた。「熊の家」には作者名も画家名も記載されていないが、カラー印刷の挿絵が添えられている。

登場者：父熊、母熊、子熊、花子さん

内容：森のなかに熊の家があった。食堂に三つの椅子、二階には三つの寝臺があった。ある朝、母熊が熱いお汁（つゆ）を作り、冷める間熊たちは散歩に行った。花子さんが森で道に迷って熊の家に来た。中に入ってみると、お汁の入った丼が三つあったので味見をし、三つの椅子も試して、一番小さいのに腰掛けて小さい丼の汁をみな吸った。二階の寝臺も試して、小さいのに寝た。熊たちが帰って来て、椅子、お汁、寝臺を見て驚いた。目を覚ました花子さんは、窓から飛び出して一生懸命逃げた。「面白いお話ではありませんか。」

図 13　「熊の家」熊の家族

挿絵：3図。熊の家族も花子さんも、都会的な日本の衣装を着ている。大きなリボンを頭に飾り、美しい着物に白いエプロン姿の花子さんは、当時の絵雑誌に頻繁に描かれた女の子像である。美しい着物姿で日傘をさしている母熊やジャケットに蝶ネクタイの父熊、短ズボンで衿にリボンを結んだ子熊といった服装や、布張りの椅子が並んでテーブルクロスのかかった食卓の絵には、都会的で近代的な生活が提示されている。（図13・14参照）

図 14　「熊の家」花子さんと熊たちのテーブル

底本：調査中

文章は、絵の分量の多い 4 頁の余白にコンパクトにまとめられている。花子さんが三つの丼の味見をする場面は短縮され、椅子は高さ、寝臺は堅さのみが言及されているが、お汁と椅子と寝臺の場面での熊たちの 3 回くり返しは「おや、私のにも」「私のにも」と短くしながらも省略せずに再話している（文字の大きさの工夫はない）。しかし、花子さんが座った椅子はミシミシ音を立てるがその場では壊れず（帰って来た子熊が壊れていると指摘する）、熊たちは野性の凶暴性を失っていて、女の子を見て驚くのみで怒ったりはしないなど、危険や恐怖を伴う内容が薄められている。また、子熊の椅子と寝臺を「小さい、やはらかい」、丼を「小さく、可愛（かはゆ）らしい」とする描写や、あどけない表情をした花子さんの絵から、子どもを保護すべき無垢な存在としてとらえる児童観が感じられる。流行の美しい衣装を身につけた花子さんと都会風の生活をしている熊の家族の挿絵は、モダンな都市文化へのあこがれをかき立てる役割を果たしており、それも大正期の絵雑誌の特徴のひとつであった。

3） 1918（大正7）年　佐藤春夫「大熊中熊小熊（おほぐま ちゆうぐま こぐま）」
（『赤い鳥』1巻6号）「赤い鳥」社　1918.12.1

『赤い鳥』は、鈴木三重吉（1882-1936）が 1918 年 7 月に創刊した芸術性を重視した児童雑誌であった。「大熊中熊子熊」は創刊からまもない第 6 号に掲載された。作者名は佐藤春夫と記されているが、桑原三郎が指摘しているように『赤い鳥』においては作品の作者が実際の作者と一致するかは疑問であ

る[8]。この話の次に同号に掲載されている「三匹の小豚」の作者名が鈴木三重吉となっており、両話ともアンドリュー・ラングの『緑色の童話集』（1892）に所収されているため[9]、「大熊中熊子熊」もあるいは三重吉が佐藤春夫の名前を借りて再話したものとも推測される。

同号の挿絵を描いた童画家の鈴木淳(すずき あつし 1892-1958)は、東京美術学校先輩の清水良雄の紹介により『赤い鳥』に多くの挿絵を提供した。

登場者：小熊、中熊、大熊の3匹の熊、お婆さん

内容：北海道の森に3匹の熊が住んでいた。ある日、熊たちはお粥をこしらえて、朝の散歩に出かけた。留守にお婆さんがやってきて、大中小の茶碗のお粥を食べてみて、小熊のお粥を全部食べてしまった。3つの椅子に腰掛けてみて、一番小さな椅子に座ったが、底が抜けて尻餅をついた。階上の部屋で3つの寝臺（ねだい）を見つけて、横になってみた。大きいのは頭の方が高すぎる、中ぐらいのは足の方が高すぎる、小さいのは頭の方も足の方も高すぎず寝心地が良かったので、布団を掛けて眠った。

3 匹の熊が帰って来て、お粥、椅子、寝臺のところで唸ったり、怒鳴ったり、泣いたりした。寝ているところを見つかったお婆さんは慌てて窓から飛び降りると、転ぶようにして森に逃げ込んだ。

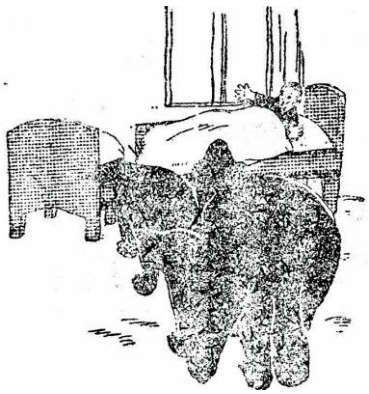

図 15 「大熊中熊子熊」p.33

挿絵：3図のモノクロ画が付されている。3図とも、服を着ていない野生の熊が描かれている。ベッドで驚くお婆さんの姿はユーモラスである。（図15参照）タイトルの上部に北海道を意識したのか、アイヌ風の模様が描かれている。

底本：アンドリュー・ラング『緑色の童話集』（Andrew Lang, *The Green Fairy Gook*. London: Longmans & Co., 1892）所収の「3びきのくまの話」（“The Story of the Three Bears”）と推定する。ラングは、ロバート・サウジーの「3びきのくまの話」をほぼ原文どおり掲載している。

著者は、ラングの「3 びきのくまの話」を、場所を北海道に設定し、省略と加筆を加えて再話した。省略は、熊たちが人間並みに暮らしている様子、イギリスらしい習慣、筋に影響しないお婆さんの夢の部分になされており、加筆はお婆さんの言う悪口やハンカチで口をぬぐう動作などである。それによってお婆さんの感情や個性が表現されて臨場感が高められ、昔話から読み物風に変化した。熊たちのセリフの文字の大中小は踏襲されていない。熊たちは底本どおり 3 頭とも牡熊で、「のそ／＼」と動くと表現されて野生の熊らしさが増している。熊は大きさにより、「私（わし）」「己（おれ）」「僕」と自分の呼称を変えている。また、「づか／＼」「メチャ／＼」「わァ／＼」「ストン」などの擬態語や擬音が多く使われており、口調もよくて、物語がテンポ良く進む再話であった[10]。挿絵の熊たちは擬人化されずに四つん這いで描かれていて、家の食卓やベッドは人間用のように感じられるため、お婆さんが熊を見て驚く様子（図 15）は、人間の家で熊に遭遇した実体験のような現実感がある。

4） 1920（大正9）年「三匹の熊」（日本幼稚園協会編『幼児に聞かせるお話』）内田老鶴圃 1920.1.6

『幼児に聞かせるお話』は、東京女子高等師範学校附属幼稚園で実際に用いられていたお話から選んで編んだお話集である。各話の出典については、倉橋惣三や同園保姆の創作に加えて、雑誌やお話の本から採られているものも含まれており、「永い間の事で、何處から来たか分からなくなって居たり、實際の経験上自由な改作が加へられて」原作の形をほとんど失って出処が不明になっているため、「同幼

稚園の談話資料の中から」としたと「はしがき」に記されている[11]。巻末には倉橋著「幼児教育の手段としてのお話」が所収されている。なお、「三匹の熊」には挿絵は付けられていない。

編者の日本幼稚園協会は、東京女子高等師範学校附属幼稚園内にあった研究会「フレーベル会」を1918年に改名したもので、当時女高師教授で幼稚園主事であった倉橋の指導のもとに活動していた。

登場者：お父さんの熊、お母さんの熊、子供の熊、花子さん

内容：森の中に熊の家族が住んでいた。熊の家にはテーブルのまわりに、三つの椅子、二階には三つの寝臺があり、どれもお父さんのが一番大きく、お母さんのは中位、子供のは一番小さかった。ある日、熱いお汁（つゆ）を丼に入れて、冷めるまで散歩に出かけた。花子さんが熊の家に来た。今朝早く森に来たので、くたびれてお腹がすいていた。まず椅子にかけた。高くて大きくて困った、中位のも高すぎる。小さいのは「高さは丁度よいのでどつかりと腰をおろしましたらミシ／＼と音がしてこはれさうになりました」がかまわずに、一番小さな丼のお汁を皆吸ってしまった。三つの寝臺は、かたすぎる、まだ固いと調べて、一番小さい、柔らかいのに寝た。三びきの熊が散歩から帰ってきて、椅子、お汁、寝台を見て、それぞれの声で怒る。花子さんの行動では語られなかった小さい椅子が壊れている事、他の丼のお汁の味見をしていることも、熊の言葉で説明される。目が覚めた花子さんは、「びつくりして飛び起きて、窓から飛び出して、一生懸命に逃げて行きました。」

底本：不明。幼稚園で語られているうちに変化したと推定。

底本は判明していないが、この「三匹の熊」は登場者の行動のみが時系列に沿って語られていて、花子さんの性格などについての枝葉はなく、善悪などにも言及していない。熊の家族の言葉の3回くり返しは、簡略化しているが省略はしていない。椅子が壊れたことや、三つの丼のお汁を花子さんが試したことが、帰って来た熊の会話から分かる構成は、花子さんの行動が後に判明するという面白さがあり、物語を聞くことに慣れた子どもたち向けの再話であると考える。園児に何度も語られてきたために、文章に無駄がなく、起承転結のはっきりした昔話の語法に近いものとなったと推測する。

明治期の1907年に同じ東京女子師範学校で幼稚園教育に携わっていた東基吉による「三匹の熊」（第2章2）参照）と比較すると、同タイトルであることと熊の家族から語り始めるのは同じであるが、こちらは3匹の熊の椅子、寝台、丼の大きさが最初に語られ、東の特徴であった座布団や七輪といった日本化は姿を消している。主人公の名前が頓子という頓馬を思わせる蔑称から、一般的な女の子を意味する花子さんに変わったのも、礼儀を知らない女の子が罰せられるという東の教育臭のある再話から、3回くり返しや女の子が危うく危険を脱するという「お話」（幼年物語）の面白さに重点が移ったことを示していると考える。

5) 大正期の考察

幼児向けの絵雑誌に掲載された2作品は、熊の家を訪れた少女の名前が日本化され、物語も単純化されている。挿絵が雄弁に語っており、エプロンを着けた少女の絵が大正絵雑誌の特徴をよく示している。

『赤い鳥』掲載の「大熊中熊子熊」は、明治大正期を通じて唯一のサウジーの原話を踏襲したお婆さんが登場する再話であった。省略と加筆によって臨場感のある物語になっており、熊の挿絵も現実感が強い。日本幼稚園協会出版の『幼児に聞かせるお話』に所収された「三匹の熊」は、語りによって磨かれて昔話の語法に近いものとなった。明治期の東基吉と併せ、東京女子師範学校附属幼稚園という幼児教育の先進的な現場に「3びきのくま」の話が受け入れられていたことが確認された。

５．考察

日本におけるイギリスの昔話「3 びきのくま」の受容は、まず明治期の英語教育の副読本として始まり、その後、児童雑誌と幼稚園で語る物語集に登場した。

英語学習の教材としては、物語が女の子と 3 びきの熊による 2 度の 3 回くり返しという特徴を持っていることが、文法を学ぶ上で有効であったと考える。最初の紹介である渡辺光子「The Story of the Three Bears（3 びきのくまの話）」（『Popular Fairy Tales（よく知られた昔話集）』英学新報社 1902）は、ジェイコブズの文章を底本としており、原本では牡熊であった中位の熊を母熊に変更した以外はほぼ忠実な再話であった。その後の 2 種類の英文教材も合わせて、物語に登場する熊の家族の生活の描写とユーモラスな挿絵によって、「3 びきのくま」は英米の文化を伝達する役割も果たしていたと考える。

「3 びきのくま」の邦文での最初の受容である「銀髪（ぎんげ）さん」は、児童雑誌（『少年』17 号 時事新報社 1905）に掲載された。底本は特定できていないが、3 回くり返しをきちんと語る再話で、熊は野生の凶暴性をもった生きものとして描かれていた。同じ北沢楽天の挿絵を付けて再話された大正期の「熊のお家」（『子供之友』1 巻 1 号　婦人之友社　1914）は、3 つの原典を参照した再話だと推測するが、女の子が熊の家に入りこんで、昼食と椅子とベッドを試し、寝込んだところに熊が帰って来て 3 つの場所で怒りの声を発し、目覚めた女の子が窓から飛び降りて逃げるという話の骨子が過不足なく再話されていた。その後の絵雑誌に掲載された「熊の家」（『日本幼年』3 巻 6 号 東京社 1917）は、カラー挿絵が効果的に用いられ、きれいな着物を着て大きなリボンを付けた女の子がモダンな熊の家でいろいろと試すというちょっとした冒険物語として再話されており、熊は危険な動物ではなくなった。また、『赤い鳥』（1 巻 6 号 「赤い鳥」社 1918）掲載の「大熊中熊小熊」は、お婆さんが登場するサウジーの原話（ラング『緑色の童話集』所収）を底本とし、くり返しもきちんと再話されているが、北海道が舞台とされ、擬人化されていない熊の挿絵も加味されて、家の中で熊に遭遇したリアルな恐怖が感じられる。英語教材同様に、雑誌においても最初に原典に忠実に再話され、時代に沿って日本化していった様子がうかがえた。

「3 びきのくま」の話は、明治期以来幼稚園教育と結びついて受容されたという側面があった。幼稚園における物語の語り聞かせは、1899（明治 32）年に制定された「幼稚園保育及設備規程」において保育項目の「談話」として正式に位置づけられ、大正期にはアメリカのストーリーテリングに影響を受けた「お話」が紹介された[12]。「談話」は「徳性ヲ涵養」することが求められたため道徳教育の傾向があり、「お話」は幼児を楽しませることに主眼を置いていた[13]。明治期に東京女子高等師範学校附属幼稚園に関係していた東基吉『子供の楽園 ： 教育童話』（1907）の「三匹の熊」は、教育をまだ受けていない少女が恐い目にあう教訓話として改変されており、大正期に同じ幼稚園でまとめられた『幼児に聞かせるお話』（1920）所収のものは、何度もくり返し語られたことで物語の面白さが磨かれた再話となったと推測する。どちらも出版当時の幼稚園での語り聞かせの特徴を示したものであった。

なお、昭和期になると「3 びきのくま」は原典を離れてより日本化されていった。特に第二次世界大戦中と戦後の再話には、時代の動きと児童観の変遷が明白に反映していた。「3 びきのくま」の受容について、今後も考察を続けたい。

本論文は、日本児童文学学会第 60 回研究大会（2021 年 11 月 21 日　於大阪府立中央図書館・オンラインとのハイブリッド開催）においての研究発表「「3 びきのくま」の受容研究 ――明治期から昭和前期を中心に――」を元に、再構成したものである。

＜注＞

[1] 拙著「レフ・トルストイ「3 びきのくま」論：底本探究から見えてきたトルストイの特性を中心に」『梅花児童文学』29 号　2022 年 3 月　34-48 頁　参照。

[2] これまでは 20 世紀になってからとの言及が多いが（キャサリン・ブリッグス、マリア・テイターなど）、1888 年出版の絵本『3 びきのくま』*The three bears*. New York: McLoughlin Bro's,, (Young Folks' Series) の少女が Goldilocks となっているのを確認した。なお、Golden Locks としたものも存在する。

[3] 1902 年版の邦文の奥付に著者は「津田梅子」と書かれているが、タイトルページの記載は、「*Popular Fairy Tales. Adapted for Japanese Students.* By Mitsu Watanabe, Revised by Alice M. Bacon」（『よく知られた昔話：日本の学生たちに適する』 渡辺光著　アリス・M・ベーコン校訂）である。前書きなどから、津田梅子ではなく渡辺光（光子）の著作をアリス・M・ベーコンが校訂したものであると判断した。

[4] 「はしがき」（ページ付なし）は、「子どもに聞かせる御伽噺は、必ず教育的でなければならぬ。然しながら其教育的といふのは、必ずしも修身、道徳上の意味を、露骨に其話に顕し出せといふのではない。」という文章から始まっている。

[5] この『3 びきのくま』絵本は、古い分類シールが貼られた原書が奈良女子大学学術情報センターに保存されている。早い時期に日本に入っていたことが確認される。

[6] 三宅興子『日本の絵本の歴史』〈子どもの本〉研究 3　翰林書房　2019 年　56-57 頁。三宅は『子供之友』に『金のがちょうの本』の 4 作品が掲載されていることを指摘したうえで、「熊のお家」の内容と挿絵について、レズリー・ブルックの底本を楽天が変更したと推測している。

[7] 「3 びきのくま」以外の『子供之友』掲載作品は、「親指太郎」（1 巻 2 号 1914 年 5 月）、「黄金（きん）の鵞（あひる）」（1 巻 3 号 1914 年 6 月）、「三疋の小豚」（1 巻 5 号 1914 年 8 月）である。

[8] 『鈴木三重吉童話全集　別巻』（文泉堂書店　1975 年）22-23 頁など。『赤い鳥事典』（柏書房 2018）の佐藤春夫の項にもこの作品は本人が直接再話したかどうか明らかでないことが記されている（185 頁）。

[9] 「3 びきのくま」は、ラングの『緑色の童話集』とジェイコブズの『イギリスの昔話』(1890)に同じサウジーの原文が掲載されている。底本がラングの『緑色の童話集』であると判断した根拠は、『赤い鳥』同号掲載の鈴木三重吉「三匹の小豚」の内容からである。『イギリスの昔話』所収の「三匹の小豚」が 3 びきの小豚と狼の話であるのに対して、ラングの「三匹の小豚」は身体の色と性格が異なる豚の 3 兄弟と狐の話となっている。狐の登場する三重吉の「三匹の小豚」は明らかにラングを底本としていると判断される。

[10] 登場者の会話を加筆したり感情表現を付加したりするのは三重吉再話の特徴であり、「大熊中熊小熊」が三重吉による再話であると推測する根拠の一つとなると考える。（「ロシア昔話「ゆきむすめ」とその受容研究：明治期・大正期を中心に」『梅花女子大学心理こども学部紀要』7 号　2017 年 3 月　6 頁参照）

[11] 『幼児に聞かせるお話』「はしがき」内田老鶴圃　1920 年　1 頁

[12] 倉橋惣三「机辺だより　話の仕方（ブライアント氏）」『婦人と子ども』12 巻 2 号　1912 年 2 月　98 頁（日本幼稚園協會『幼児の教育』復刻版　12 巻　名著刊行会　1979 年　所収）で、喜びや愉快を伝えるお話論を紹介した。また、水田光(1882-1964)は『お話の研究』（大日本図書 1916 年）、『お話の実際』（同 1917 年）などでストーリーテリングについて解説し、多くのお話を紹介した。

[13] 小山みずえ「大正・昭和初期の幼稚園における「お話」の成立過程：大阪市立幼稚園における実践・研究を中心に」『保育学研究』46 巻 2 号　2008 年　121-122 頁

掲載した図版は全て著作権法を遵守しています。